「霊界で観た宇宙 七巻　霊・神・人」より　②

（昭和四十一年　四月発行）

「霊魂（たましい）は人の元祖」

人間には霊と魂がある。魂は人が生まれた時より個人に天性自然に賦与された。只の一人も魂のない人はない。魂がないと死人と同じである。霊は神霊の霊である。個人の魂が宇宙の御神霊と和合するを霊魂（たましい）という。即ち神人合一のことである。精神的をハッキリするには宇宙大精神の神霊に通うて、われ神也と自信をもって神に成りきることである。霊がなければ精神も神もない。魂がなければ體はない。霊魂（たましい）は人の元祖であるから最も大切である。神の御精神よりわれ等に分霊として与えられる。斯様なことを教えるを宗教という。人間はこの霊魂の与え主である御祖（みおや）の神を知るのがよい。霊魂の理解があって宇宙根源の神を知る。生きた宇宙大精神を知ることが人間が己を知ることである。霊魂を知ると宇宙の霊の源を知る。これを人生を知ったという。人間が生まれると同時に神より授けられた魂の働きの一端を述べる。うまれて直ぐに目も見えず、分別もなき嬰児が乳を要求し、熱き物に触れれば、泣いて知らせる。斯様にわが身を擁護するは魂の働きであり、個人の満足を求める働きをする。